一休朱太刀の像について

中本　環

一休が、一休噺を中心とする、近世のおびただしい一休説話の素材となっていることは、広く知られている。この一休説話の内容は、一休の頓智・機智等の、いわゆる奇行がその母体となっている。一休の奇異な言動は、一休の狂雲集や自戒集、更には、東海一休和尚年譜や一休和尚行実等の、当時のたしかな資料の中にも散見する。このような、一休の奇異な言動の記事に接すると、おのずと、一休当時の人々も亦、一休の奇行を、単に驚かされ笑わされる程度のものとして、高くは受けとめていなかったのではないかと思いがちになる。これはたぶん、近世におけるおびただしい一休説話の、笑話的印象によるものであろう。しかしながら、一休の奇異な言動も、当時の人々に、いわば尊崇の対象として、高く受け止められていたと考えられるのである。この点を、一休朱太刀の像の成立及び伝播をめぐってたしかめようとするのが、本稿の目的である。

高い思想や精神に支えられたいわゆる奇行は、そのまわりの人々に、新しい行動様式や物の考え方等を切り開く可能性を、比較的大きく有すると考えられる。このような観点からすれば、一休のいわゆる奇行が、当時の人々に、いわば尊崇の対象として高く受け止められていたかどうかをたしかめることは、文学の方面にも、間接的にもせよ、意味のあることとみられよう。

×　　×

一休の嗣法で、親しく一休に接していた没倫紹等の手になる東海一休和尚年譜の、永享七年（一四三五）の条には、次のような記述が見える。

師年四十二歳、曾在泉南、毎出遊街市、持一木剣弾鋏、市人争問師、剣以殺為功、師持此剣、是甚歴用、答曰、汝等未知、今諸方賢知識似此木剣、収在室則殆似真剣、抜出室則只木片耳、殺猶不能、況活人乎、人皆咲之、瑞子繪師像、曲録牀角畜長剣、以代烏藤、讃有吹毛三尺撥動烟塵之句。

市人の行き交う街中を、禅僧が、木剣を持って出歩くことは、奇異な行動とみられる。「市人争って師に問う」という記述も、木剣を携えて歩く一休の姿が、人々に、奇異に映じたことを物語っている。人を殺す為の剣を、師はどうしてお持ちなのかという市人の問に対し、一休は、「今の諸方の賢知識此の木剣に似たり、収めて室に在れば則ち殆んど真剣に似る、抜いて室より出ずれば則ち只木片のみ」と、寺中にあっては真の僧のごとくであっても、人々の中に交わっては何の役にも立ち得ぬと述べ、更に、当時の「諸方」の

「賢知識」は、人（煩悩等の意味――筆者）を殺すことも活かすことも出来ぬ無力の者だと答えている。

文明年中より寛永年中に至り、仏法と曰へば紫野を敬崇せざるは無し、その来由を原ぬるに、諸崇は講経を以って人を取り、五山は文章を以って人を取る、独り紫野に有っては参禅学道、心地を究明するを以って人を取る（龍宝山誌、原文漢文）

という文明年中に、やがてさしかかろうとする紫野大徳寺の一休と、幕府の庇護のもとに、安易と停滞のうちにある同じ禅宗の五山とを考え合わせれば、あるいは、一休のこの批判のことばも、当を得ているかとも思われるが、この点はおくとして、一見奇異に映ずる一休の行動の中に、確とした意図を持っていた点は、留意すべきであろう。ところで、この一休の答えに対して、「人皆之を咲う」と記されている。この「咲」いは、いわゆる一休説話につながる可能性を持っているけれども、説話としての流れをたどらなかったようであり、一休嘲や一休諸国物語図会等の、近世の一休説話の中にも、未だ見出し得ていない。もち論、当時の人々の間に、「咲」いをもたらす話しとしても語られたことであろうが、ともかくも、この一休の奇異な行動は、「瑞子」によって、すぐさま、「曲録牀角」つまり、師家が説法・法要に際して用いる腰かけの一角に、「長剣」を「靠」りかからせた像として描かれているのである。このことは、一休の言動が、いわば尊崇の念を得ていたことを物語ると考えられる。ところで、「人皆咲之」という先掲の記述は、一休を人々があざけり笑ったという意味にとることも、十分出来うる。市人たちは一休をあざけり笑ったのだが、一休に近侍する者であった瑞子[注1]は、一休の木剣（長剣）に関する言動を理解して、いわば孤立の状態の中で一休の長剣の像を描いたと受取ることも出来るわけである。しかし、市人たちのあざけりの笑いの中で、すぐさま一休長剣の像を描くということは、考えにくい。「人皆咲之」の「咲」いが、あざけりの笑いでなかったろうことは、次のような年譜中の記述によっても、肯定されるようである。木剣云々の事柄のあった三年前の永享四年（一四三二）の条に、場所は同じ泉での出来事として、次のような記述が見られる。

冬携沅子、遊泉…（中略）…一日入檀家、欄有老牛、戯書一偈掛其角端云、異類行中是我曾、能依境也境依能、出生忘却来時路、不識前身誰氏僧、其夜牛斃矣、翌日牛主戯師曰、師頌殺吾牛、師一咲。

「戯れに一偈を書して其の角端に掛け」た「檀家」の「老牛」が、「其夜」「斃」れたのであるが、その翌日、「牛主」は、「師の頌吾が牛を殺す」と、「師に戯れて曰」っている。この「師に戯れて」という記述は、「牛主」と一休との、とけあった人間的つながりを思わせるが、この「牛主」は、一休が木剣を携え歩いた同じ泉の住人なのである。この点をふまえて、「（泉の）人皆咲之」という記述を見直す時、この「咲」いが、一休へのあざけりの笑いとは受取りがたく思われる。木剣云々の翌年の永享八年（一四三六）の条（年譜）には、次のような記述が見られる。

是年丁開山国師百年遠忌、師往拝塔下、一女子戴衣襲而随後、仍述偈以当斉供…（以下略）…

「往きて塔下に拝」しようとする一休に、「一女子」が「衣襲を戴いて後に随」っているのも、先の「牛主」の場合とは趣きを異にするようではあるが、一休と市井の人々との結びつきを思わせるよう

である。

街中を木剣を携えて歩くという一休の奇異な言動は、すぐさま長剣の像として描かれるということを一つの徴証として、当時の人々に、いわば尊崇の念を以っても受入れられていたとみられるわけである。

さて、このようにして成立した一休の長剣の像は、以後も、年代を隔てて、少くも三幅は描かれている。以下、この三幅の成立年次や成立事情についてみてゆきたい。

京都紫野の真珠庵には、通称、一休朱太刀像と呼ばれる一休の画像が、二幅現存する。この二幅の画像は、全く同じ構図で、同一物かと見える程似通っている。ところで、この二幅の構図は、先掲の、年譜の永享七年の条の「長剣」を「曲録牀角」に「靠」りかからせているという記述に、符合する。しかも、真珠庵の画像の一幅（これを甲と呼び、他を乙と呼ぶことにする）には、年譜に「讃に吹毛三尺撥動烟塵之句有り」と記されていたところの、「吹毛三尺撥動烟塵」の句を有する讃が記されているのである。このような点から、真珠庵に現存する通称一休朱太刀像甲乙二幅は、永享七年に瑞子によって描かれた一休の長剣の像と、同じ（いわば模写した）ものとみて、間違いないと思われる。

ここで、一休朱太刀像甲に記された讃を見ると、次のとおりである。

喝下分主賓　句裡転機輪　竹箆帰掌握　払魔倶不親　吹毛三尺撥動烟塵　慣戦作家　七事随身　八方受敵　坐断要津　呵仏罵祖　奪境奪人　婬坊酒肆　独朗天真　宗門作略　須遷宗純　劈　臨済正法今墜地　但願祖教再回春

蓑笠紹徳山主図余陋質需賛書以塞其請

享徳二歳季夏日狂雲子宗順（一休印）

「紹徳山主」が一休の太刀の像を描き、それに、「需」められて、一休が享徳二年（一四五三）に讃を加えている。画像の成立時期と、讃を記した時期とは、必ずしも一致しないであろうが、長い年月の隔たりはまず無いといってよいであろう。従って、この一休朱太刀像甲は、享徳二年頃成立したと、一応考えられる。享徳二年は、瑞子が一休の長剣の像を描いた永享七年から、十八年後に当る。なお、紹徳は、一休十三回忌に、約六百名の中の一人として、壱貫文を寄進している（真珠庵文書）。

真珠庵に現存する他の一休朱太刀像（乙）には、次のような讃が記されている。

華叟子孫不知禅　狂雲面前誰説禅
三十年来肩上重　一人荷担松源禅

自賛語応禅勇居士求

前紫野龍宝山大徳寺東海順一休天下老和尚（一休印）

一休は、文明六年（一四七四）に紫野の大徳寺住持の論旨をうけたが、入寺の法語と共に退院の法語を唱え、わずか一日しか住しなかった。従って、「前紫野大徳寺」という識語から、この讃が記されたのは、文明六年以後ということになる。画像そのものは、いつ、誰の手によって成ったものかわからないが、一応、文明六年以後と考えるのが無難かと思われる。文明六年をさかのぼることも考えられるが、この場合も、長くさかのぼるとは考えにくい。一応文明六年をとると、瑞子が一休の長剣の像を描いた永享七年からは三十九年後、紹徳が朱太刀像を描いた享徳二年からは、二十一年後という

ことになる。このように、一休の長剣(朱太刀)の像は、長い年月にわたって、途絶えることなく、くり返し描かれたのである。なお、一休に「自賛語」を求めた「禅勇居士」は、真珠庵文書の十三季忌出銭帳に、約六百名の中の一人として、次のように記されている。

弐貫文　越前　過去　禅勇

ここに「過去」と注記されているのは、一休十三回忌の明応二年(一四九三)には、既に故人となっていたことを意味する。従って禅勇は、その生前に、一休の十三回忌には弐貫文を寄進するよう、肉親か誰かに依頼していたように考えられ、禅勇の、一休への敬慕のさまが思われる。このような禅勇が、一休朱太刀像乙を所持していたわけである。

さて、一休の生前に、既に、少くも三幅は成立していたこの一休の朱太刀(長剣)の像は、一休の没年(文明十三年・一四八一)の四十五年後、大永六年(一五二六)にも、宗長の「感得」を呼びおこしている。宗長手記(群書類従本)によれば、大永六年十一月、江州矢島の少林寺[注2]に入った宗長は、そこで一休の「太刀の尊像」を拝し、短歌を二首詠じている。

一休尊像太刀の尊像感得奉て。

打払ふ床のあたりにをく太刀のさやかにいつこ曇る塵なき

くもりなき又すゝしき剣太刀ときし心のますかかみかな

「一休尊像太刀の尊像」は、「一休尊像」と「太刀の尊像」の二幅を意味するともとれるが、詠ぜられた二首の短歌に、それぞれ、「太刀」「剣太刀」のことばのある点から、「一休尊像」則ち「太刀の尊像」の意味にとるべきであろう。この「太刀の尊像」が、前述来の朱太刀の像と、ほゞ同じ(いわば模写した)ようなものであることは、短歌の「打払ふ床のあたりにをく太刀」という表現が、師家のすわるいすによりかからせた長剣、という、永享七年の年譜の内容及び真珠庵の甲乙二幅の画像に符合する点からも明らかである。この、一休の「太刀の尊像」の前に立った宗長の「感得」が、どのようなものであったかは、詳らかにはしえないが、「太刀の尊像」の基となった永享七年の一休の言動そのもののみを思いうかべて「感得」したというのではなく、その「感得」は、一休に親しく接した頃の思いをはじめ、その後の、一休に関わるさまざまの要素が、その支えになっていると考えるべきであろう。しかし、宗長に「感得」をよびさました一休の「太刀の尊像」が、街中を木剣を携え歩いたという、一休の、人の意表をつくような奇異な言動の、いわば記念の像であることは、宗長も知っていたにちがいない。

ところで、宗長は、この大永六年を三十八年さかのぼる長享二年(一四八八)の頃、一休の朱太刀の像を、「宗信侍者」をして描かしめていたのである。この事は、寛文八年(一六六八)に、如松子福住道祐によって記された宗長居士伝の、次のような記述によって知りうる。

或時作二太神宮法楽千句独吟一、同月使下宗信侍者模中写一休和尚佩二朱刀一肖像上、請二于宗等没倫一斉号墨書二自賛語一為二一幀一

ここに、「一休和尚佩朱刀肖像」とあるのは、前述来の一休の朱太刀の像とほぼ同じものとみて、間違いないと思われるが、この宗長居士伝によれば、「一休和尚佩朱刀肖像」は、「太神宮法楽千句独吟」の作られた時と「同月」に成立したことがわかる。ところで、この「太神宮法楽千句独吟」は、大嶋俊子氏の宗長年譜[注3]によって、長享二年七月頃詠ぜられたことが知れる。大嶋氏の宗長年譜には、

長享二年の条に、「七月、伊勢神宮にて法楽連歌『伊勢千句』（天理本他）独吟か。」と記されているが、この、伊勢神宮での法楽連歌独吟が、宗長居士伝に記す「太神宮法楽千句独吟」であることは、共に、伊勢太神宮での、法楽の、千句の、独吟であること、によって、認めてよいと考えられる。従って、「太神宮法楽千句独吟」を、宗長年譜により、長享二年七月頃の成立と認め、そして、「一休和尚佩朱刀肖像」も亦、これと「同月」の、長享二年七月頃に成立したものと考えるわけである。なお、この「一休和尚佩朱刀肖像」を「模写」した「宗信」は、長享二年の五年後の、明応二年（一四九三）の一休十三回忌に、納所方及び奉行の一員として、その務めを果している（真珠庵文書）。一休の「自賛語」を記した「没倫（紹等）」は、明応元年（一四九二）五月に没している。(註4) また彼は、一休が開祖であるところの真珠・酬恩両庵の第一世である（真珠酬恩両庵歴代世次）。

さて、宗長は、このように、一休の没年の約七年後、一休の朱太刀の像を写さしめているのであるが、その動機や意図がどのようなものであったかは、はっきりはわからない。しかし、宗長年譜によれば最初の独吟千句であるところの「太神宮法楽千句独吟」を詠じたその同じ月に、一休の朱太刀の像を写さしめていること、そして更に、その像の一休の自賛を、一休の法を嗣ぎ、真珠・酬恩両庵の第一世となっている没倫紹等に、書いてもらっていることは、宗長の一休への、なみなみならぬ尊崇の念を思わせるようである。長享二年から三十三年後の大永六年に、江州矢鳥の少林寺で、一休の「太刀の尊像」に接して、「感得」した、先掲の宗長手記の記述が、思いおこされる。

ところで、宗長が、宗信に一休の朱太刀の像を写させ、没倫に一休の讃を記してもらったということが、宗長手記の一本、広島大学所蔵の九ケ記の末尾に記されている。この九ケ記（一冊）は、群書類従本宗長手記の下巻に当るもので、江戸初期の写しとみられるが、その末尾に、本文と同筆で、本文に引き続き、次のように記されている。

一休和尚竹篦朱太刀像

喝下分主資　句裡転機輪…（中略、先掲の真珠庵一休朱太刀像甲の讃と同文）…但願　祖教再回春

大永六年丙戌小春日(註5)　裡書ニ云

先師尊像依宗長老人所望宗信侍者被奉写之　自賛語没倫老師墨跡也

これが、どのような経緯をたどって、宗長手記の一本である九ケ記に記されたかは、興味ある問題であるが、いまはこの点の考察は後の機会にゆずるとして、ともかくも、宗長が、宗信をして一休の朱太刀の像を写さしめ、没倫に、一休の自賛を書いてもらったという、宗長居士伝の傍証となるであろうと思われる。

宗長が、一休の朱太刀の像に接して「感得」した太永六年から七十八年後の、慶長九年（一六〇四）の奥書を有する越後在府日記（一冊。広島大学蔵）に、一休の朱太刀の像にふれた記事が、わずかながらみられる。

僧一休影ニ朱さやの太刀右に有、口伝云〻三尺の竹篦吹毛の剣

「一休影」の「朱やの太刀」は、前述来の一休の朱太刀の像を意味し、「三尺の竹篦吹毛の剣」は、年譜の永享七年の条、及び、真珠庵の一休朱太刀像甲の讃にも記されていた「吹毛三尺撥動烟塵」の

語句や、同じく一休朱太刀の像甲の讃の中の「竹篦帰掌握」の語句と関連があろう。越後在府日記の一休の朱太刀の像に関する記事は、ただこれだけで孤立し、この前後は、一休と何の関係もない記事が、羅列されている。この越後在府日記は、いわゆる日記とは性格を異にし、筆者の目にし耳にした文献や口碑のたぐいの一節を、かき集めて羅列した形をとっている。従って、筆者がどのような意図でこの記事を記したかは、わからない。ただ、筆者が、越後に在って、一休の朱太刀の像を見たか、あるいは、これに関する話しを聞いたとは言いうるであろう。

さて、以上、永享七年（一四三五）における一休の、街中を木剣を携え歩くという言動は、その時すぐさま長剣（朱太刀）の像として描かれ、そして、享徳二年（一四五三）頃、文明六年（一四七四）頃、長享二年（一四八八）頃と、くり返し描かれ、あるいは模写され、更に、慶長九年（一六〇四）奥書の越後在府日記に記されたわけである。このような点は、一休の人の意表をつくような奇異な言動も、単に人を驚かせ笑わせるにとどまるものとして受け止められたのでなく、当時の人々に、尊崇の念をもって（あるいはその一中核となって）、高く受け止られていたことを示すと考えられる。

狂雲集や自戒集、更には、東海一休和尚年譜や一休和尚行実等に散見する一休の奇異な言動のうち、いずれが一休独自のものであり、そしてそれが、どのような新しい行動様式なり物の考え方なりを切り開いたかは、文学方面では宗長を筆頭として、今後の課題となる。

注1　「東海一休和尚年譜」によれば、瑞子は、嘉吉二年（一四四二）に、一休が初めて讓羽山に入り、そこに住するに当り、その案内をしている。なお、彼は、同じく「年譜」によって旧朝臣であることがわかる。

注2　『本寺末　近江州　少林寺　桐岳鳳禅師創、奉一休禾上、為開祖』（「龍宝山志」）

注3　「女子大国文」第二十四号（昭37・2）

注4　「真珠酬恩両庵歴代世次」他。

注5　この日付が、「一休和尚竹篦朱太刀像」の出来上った年月を示すのでないことは、この像に讃を記している没倫が、大永六年の三十三年前、明応元年に没していることによって明らかである。

或は、『一休和尚竹篦朱太刀像』に付されていた讃及び『裡書』を、写し取った年月を示すかとも考えられるが、明解を得ない。

宗長が少林寺に入って、一休の『太刀の尊像』を拝したのが、大永六年十一月頃である点と、関連があるかもしれない。

—尾道短期大学講師—